都市生活環境尺度の開発

都市－村落間の比較研究より

○佐伯大輔¹・宮崎弦太²・矢田尚也¹・池上知子¹

(¹大阪市立大学大学院文学研究科・²立教大学現代心理学部)

キーワード：都市化、自尊感情、主観的幸福感

Development of a psychological scale to measure degree of urbanization in living environments: A comparative study of urban/rural areas

Daisuke SAEKI¹, Genta MIYAZAKI², Naoya YADA¹ and Tomoko IKEAGAMI¹

(¹Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka City University, ²College of Contemporary Psychology, Rikkyo University)

Key Words: urbanization, self-esteem, subjective well-being

目 的

居住環境の都市化の程度（都市度）は、居住者に様々な影響を与えることが知られている（例えば Ledarborg et al., 2011）。しかし、都市度と心理学の変数の関係を検討した研究では、都市度を人口規模によって大まかに定義しており、都市度がどのような次元から成り、どの次元がどの心理学の変数と関係しているのかを詳細に検討したものはない。

このような観点から、矢田・宮崎・佐伯・池上(2013)は、近畿地方の大学生 215 名を対象に、居住環境の都市度を測定するための「都市生活環境尺度」の開発を行った。その結果、この尺度は、「交通の利便性」、「施設の充実」、「生活の快適さ」、「自然の乏しさ」、「活気」、「刺激の量」、「通信インフラの整備」、「買い物の利便性」の 8 因子からなること、さらに、「買い物の利便性」は自尊感情に正の影響を、「自然の乏しさ」は主観的幸福感に負の影響を与えることなどが明らかになった。

本研究では、矢田他(2013)の結果の一般性を確認するために、都市度が異なるとされる日本国内の諸地域の居住者を対象に、「都市生活環境尺度」と、都市度と関係すると思われる心理尺度を用いて、尺度間の関係を検討した。

方 法

調査参加者：調査会社にモニター登録をしている日本国内に在住の男女 1000 名（男女各 500 名、平均年齢 50.1 歳）を調査対象とした。

尺度・質問項目の構成：①フェイスシート：年齢、性別、居住地（農村地帯、山村地帯、市街地等）、②都市生活環境尺度（9 件法・40 項目；矢田他, 2013）、③自尊感情尺度（5 件法・10 項目；Rosenberg, 1965 の尺度を山本・松井・山成, 1982 が邦訳したもの）、④主観的幸福感尺度（7 件法・5 項目；Diener et al., 1985 の尺度を大石, 2009 が邦訳したもの）、その他、対人関係に関する質問項目が含まれていたが、これについては別の機会に発表する。

手続き：質問項目と選択肢は、調査会社の Web サイトを通して、参加者のコンピュータ画面上に表示された。参加者は、各質問項目について、自分に当てはまる選択肢をマウスで選ぶことにより回答した。

結 果

都市生活環境尺度の構成：都市生活環境尺度の回答に基づき、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を適用した結果、固有値の減衰状況から 5 因子構造が妥当と判断した（複数の因子に 40 以上の負荷量を示した 4 項目を除外）。項目内容に基づき、「施設の充実」（11 項目、 $\alpha=.87$ ）、「生活の利便性」（6 項目、 $\alpha=.75$ ）、「生活の不快さ」（4 項目、 $\alpha=.66$ ）、「自然の乏しさ」（2 項目、 $\alpha=.69$ ）、「交通の利便性」（4 項目 $\alpha=.80$ ）と命名した。

都市生活環境尺度の妥当性：人口密度に基づいて「都市群」と「村落群」に分け、各因子の尺度得点の群間比較を行ったところ、平均尺度得点は、どの因子についても、「都市群」の

方が「村落群」よりも有意に高かった（ $t > 11.11, ps < .001$ ）。

都市生活環境尺度と他の尺度との関係：都市生活環境の程度が、自尊感情や主観的幸福感に与える影響を調べるため、人口密度（Step 1）と都市生活環境尺度の各因子（Step 2）を説明変数、自尊感情と主観的幸福感を目的変数とした重回帰分析を行った。その結果、人口密度のみでは有意な影響は見られなかったが、都市生活環境尺度については、いくつかの有意な影響が見られた（Table 1）。

Table 1. 都市度が居住者の心理的側面に及ぼす影響

説明変数	目的変数	
	自尊心	主観的幸福感
Step 1		
人口密度	.06	-.03
Step 2		
施設の充実性	.09 *	.06
生活の利便性	.21 ***	.06 †
生活の不快さ	-.11 *	-.07
自然の乏しさ	-.05	-.01
交通の利便性	.05	.06
R^2	.07 ***	.01 †
ΔR^2	.06 ***	.01 *

考 察

矢田他(2013)が報告した因子と同様の命名が可能な因子が抽出されたことから、本研究で用いた「都市生活環境尺度」は、比較的安定した尺度と考えられる。また、どの因子についても「都市群」の方が「村落群」よりも尺度得点が高かったことから、「都市生活環境尺度」は都市度の尺度として妥当と考えられる。因子によって心理尺度との関係が異なるという事実は、人口密度のみでは都市度を適切に表すことができないことを示している。

都市度が自尊感情等に及ぼす影響について、矢田他(2013)とは異なった結果が得られたが、その原因については特定できていない。本研究で明らかになった、都市における「施設の充実性」や「生活の利便性」が自尊感情を高める一方で、「生活の不快さ」が自尊感情を低めるという事実は、都市的生活環境が人の心理に及ぼす影響の複雑さを表している。

主要文献

- Diener, E. et al. (1985). *Journal of Personality Assessment*, **49**, 71-75.
 Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
 矢田尚也他(2013). 関西心理学会第 125 回大会発表論文集, 94.

付記 本研究は、科学研究費（基盤研究（C）課題番号：25380846、研究代表者：佐伯大輔）の助成を受けた。